

獨協大学図書館 特別展示 2010年11月8日(月)～11月30日
(火)

カミュ展

第22回獨協大学インターナショナル・フォーラム「アルベール・カミュ 現在への感受性」の開催にともない、本学図書館では「ジャーナリストとしてのカミュ」「カミュと日本」のふたつのテーマをめぐって、日本語・フランス語の新聞、雑誌、手紙等の資料の展示をおこないます。

◇ ジャーナリストとしてのカミュ

1957年のノーベル賞受賞者であるアルベール・カミュは、『異邦人』『ペスト』『カリギュラ』などの傑作を残した作家というだけではありません。カミュは、さまざまな機会に、今まさに生成しつつある歴史とつかみあうようにして、ジャーナリストとしての仕事に打ち込んでくれたのです。まず、第二次世界大戦前に、パスカル・ピアに声をかけられ、アルジェリア人民戦線の流れをくむ新聞『アルジェ・レピュブリカン』の記者となります。そして三面記事からアルジェリアの政治、訴訟事件、新刊書籍の紹介、展覧会評にわたるまで多くの記事を担当しました。カミュの名を一躍有名にしたのは、「カピリアの悲惨」を追ったルポルタージュと、いくつかの冤罪事件をめぐる記事です。カミュは、真実を白日のもとにさらし、不当に起訴されていた被告を救おうとしたのです。1939年9月から1940年1月までは『ル・ソワール・レピュブリカン』の編集長を務めます。この新聞は裏表2ページからなり、アルジェの街頭で呼び声と共にビラのように配布されていました。絶対的な平和主義者であったカミュは、数々の偽名を使って第二次世界大戦の戦況を分析し、「本当の平和」にたどり着くための可能性を読者に提示しました。次第に厳しくなる検閲によって、この新聞は1940年1月10日に廃刊に追い込まれました。

1943年、カミュはフランスの対独協力組織（レジスタンス）に参入します。パスカル・ピアが局長を務め、カミュが編集長を務めていた地下出版の『コンバ』が初めて公に発行されたのは1944年8月21日。つまり、連合国軍が到着し、ドイツ占領軍からパリを解放する戦いが始まり、その戦乱がまだ終結していない時のことです。「レジスタンスから革命へ」という『コンバ』のスローガンの意味を、カミュは社説を書くことによって日を追うごとに明らかにしてゆき、カミュの社説はたちまち大変な評判を呼びました。しかし、カミュの健康状態は思わしくなく、また作家としての天職との兼ね合いもあり、連日の激務を強いる編集長の仕事を長年にわたって続けることはできませんでした。カミュは1947年6月3日に『コンバ』を離れます。

それから8年が過ぎ、カミュはジャン＝ジャック・セルヴァン＝シュレパールによって

1953年に創刊されたばかりの左翼系の週刊紙『レクスプレス』の時事欄を担当することになりました。1955年5月から1956年1月まで、カミュがもっとも熱をこめて筆をふるった主題は、アルジェリア戦争でした。アラブ人になされた不正は正されねばならない、そしてアルジェリアの地に生きるさまざまな共同体は、今こそ互いに理解しあい、その存在を認めあわねばならない。カミュは、自由、労働者の立場、社会の中での芸術家の存在、外交など、彼にとっての大切な問題をこの時事欄で次々と論じました。1956年2月2日の最後の寄稿は、モーツァルトへの感動的なオマージュでした。ジャーナリストとしてのカミュの仕事はこの三つの時期に集中しています。ただし、それ以外にも——当時の多くの知識人と同じように——数々の政治集会で演説をし、有名無名の新聞・雑誌に寄稿をし、論考や公開書状や抗議文書を書いていました。

◇ アルベール・カミュと日本

日本とカミュの関係はそれほど深くないようにみえるかもしれませんが、カミュはとうとう日本を訪れることがありませんでした。しかし、カミュの著作はフランスで刊行されるとたちまち日本語に翻訳され、日本には多くの読者がいます。カミュの人生において、日本という国の存在が一気に浮上することになったのは、広島に原爆が落とされた時のことです。1945年8月8日、カミュは言いました。「機械文明は、たった今、その最高度の野蛮に到達した」。カミュは、日本への原爆投下に対してきわめて早い時点で、きわめて明白な異議申し立てを表明した数少ないフランス人のひとりだったのです。戦争が終わってからの数年間、カミュは日本人の知識人たちとの往復書簡を残しています。『群像』は、朝鮮戦争の開戦直後にカミュに寄稿してくれるように依頼し、「日本人への手紙」というカミュの回答は1951年2月に刊行されました。今回の獨協国際フォーラムのテーマのひとつにもなっていますが、カミュの著作は日本人の魂と密接な関わりをもっているのです。

『カミュ展』の8つの展示台はそれぞれ、カミュの生涯の時期や、テーマを中心に構成されています。

1. アルジェで——ジャーナリストという職業の習得（1938 - 1940）

① 1939年5月に、カミュはアルジェ近くの間岳地方カピリアに旅行をしました。このときの体験から生まれたのが、『アルジェ・レピュブリカン』に1939年6月5日から15日まで11回にわたって連載されたルポルタージュ「カピリアの悲惨」です。カミュは、住民たちがおかれていた極度の貧窮状態とフランスの行政的怠慢を分析し、告発しました。このルポルタージュは1958年にアルジェリアに関する主要なテキストをまとめた『アルジェリア通信』に再録されます。本展では「カピリアの悲惨」の第一報目「襤褸（ぼろ）をまと

ったギリシア」を展示します。

② カミュは「アルジェ・レピュブリカン」紙に「サロン・ド・レクチュール（読書室）」というタイトルで31回の文芸時評をおこないました。1939年2月18日付の時評では、女性著述家による作品三つを取り上げています。そこには、スペイン市民戦争の際に熱い演説で共和主義者たちを鼓舞した「ラ・パッションナリア（受難者／情熱の花）」の別称で知られる女性政治指導者ドロレス・イバルリ（1895-1989）の論集が含まれていました。

③『ル・ソワール・レピュブリカン』紙（1939年9月—1940年1月）は、その平和主義的かつ無政府主義的な思想傾向によって、しばしば検閲を受けていました。ところがカミュは、検閲制度を自分自身の独立と自由の証として逆用したのです。検閲を受けたということが読者にもわかるようにし（新聞の副題にご注目ください）、ときには自分から「空白」を加えることもありました（「最新ニュース欄」をご覧ください）。

記事と記事とのあいだには、いくつかの短いフレーズがちりばめられているのが見えます。たとえば「ル・ソワール・レピュブリカンは主人をもたない」というフレーズ、あるいは「ル・ソワール・レピュブリカンは他紙とは違う。検閲を受けてさえ、つねに読むべきものを提供するからだ」などです。

また「戦争という観点から」欄のなかには「十字軍はいらない」という記事がみえます。この記事にはジャン・メルソーという署名がされていますが、これはカミュの偽名です。この偽名は、カミュの作品『幸福な死』の主人公の名前でもあります。

そして小さな広告のテキスト。「求む3部屋のアパートマンもしくは邸宅、都市近接郊外、陽当り良好、海がみえること。連絡先：ル・ソワール・レピュブリカン紙、カミュ」。

2. 『コンバ』編集長カミュ（1944-1947）

① ドイツ軍占領下では地下出版であった『コンバ』が公に発行され始めたのは1944年8月21日、つまり、8月25日にパリがドイツ占領軍から完全に解放されるより4日前です。ここに展示する社説「自由の血」は24日付のもので、のちに同タイトルのまま『時事論集』に再録されます。署名の「C」は、『コンバ』の頭文字です。

②『コンバ』9月8日号には、『時事論集』に再録されることになるテキストがふたつ掲載されています。ひとつめは『時事論集』の「モラルと政治」の章の冒頭におかれた社説「正義と自由」で、もうひとつはそのまま章タイトルともなった「批評的ジャーナリズム」です。この章ではジャーナリズムと情報の問題が論じられています。一方、右上に掲載されている記事では、有名なピアニストであるアルフレッド・コルトのような人物も標的となった、芸術界を襲った対独協力者の粛清について述べられています。

③ 1945年6月30日—7月1日発行の『コンバ』雑誌号の最終ページには「占領下のドイツの姿」が掲載されています。この時期を通じてカミュの書いたルポルタージュは、1945年5月のアルジェリア危機に関するものを除くと、これひとつのみです。カミュは、戦争に敗北したドイツにおけるフランス占領地域を訪れて、この記事を書きました。ドイツに行く際に通過したフランスの東部は「死者の土地」とでも呼ぶべき戦禍の惨状が広がり、それに対して、ライン河流域のドイツの各地方には比較のおだやかで平和な空気が満ちていたのです。カミュはそのあまりの対照に衝撃を受けました。

3. レジスタンス——あるドイツ人の友への手紙（3通目）

① 労働者によるレジスタンス

1943年に創刊されたレジスタンスの労働組合による週刊紙の1944年12月14日号には、カミュの記事「人間に供するために」が掲載されました。この記事は、カミュが労働者の世界とつねに深い絆で結ばれていたことを示す資料です。戦争から抜けだしたフランスが活気を取り戻し、政治が生まれ変わるためには、労働者の力こそが必要だとカミュは考えていました。

② 『リベルテ』

カミュは「あるドイツ人の友への手紙」（1943-1945）を書くことによって、『ル・ソワール・レピュブリカン』の時代の平和主義に始まりレジスタンスの一員として活動するようになるまで、自分がどのような政治的発展をたどったのかを見直すことになりました。また、自分には生地アルジェリア以外に、それまでは抽象的なものとしか感じられていなかったフランスという故国の存在があると気がついたのもこの手紙を書いていたときのことです。1945年1月5日に『リベルテ』（1941年創刊）に掲載された3通目の手紙では、ナチズムを駆逐した新たなヨーロッパの必要性が強く論じられています。同紙ではこの「あるドイツ人の友への新しい手紙」の横に、フランス側のレジスタンスに参加した「あるドイツ人の同士への手紙」が掲載されています。

4. ヒロシマー——「機械文明は、たった今、その最高度の野蛮に到達した」

① 1945年8月8日付『朝日新聞』。ヒロシマーへの爆撃〔原爆投下〕を報じています。

② 8月9日付『ニッポン・タイムズ』。爆撃の報道。8月10日付の紙面には、論説「人類に対しての倫理的凌辱」が掲載されています。このような爆撃が国際法に照らせば違法であることを述べたうえで、たとえ日本をすみやかに降伏させるという目的のためであっても、正当化されえない非人道的な性質のものであることが強調されています。「これは戦争

ではない。これは殺人でさえない。これは純然たるニヒリズムだ。これは神と人間に対する犯罪であり、倫理的存在をその土台から攻撃するものだ」

③ 8月8日付『コンバ』。カミュによるもっとも有名な論説のひとつをコピーしたもの。『時事論集』に再録されます。6番の展示台にある1954年8月9日付のフランス文学者片岡美智への手紙も参照してください。

④ 1945年8月30日。作家の大田洋子による有名な記事「海底のやうな光／原子爆弾の空襲に遭って」のコピー。大田洋子は被爆者のひとりとして、原爆が投下された後の人々の状況とこれほどの残酷さに対する自分自身の感情を感動的な言葉で表現しています。

5. 『キャリバン』(1948-1951) を支持するカミュ

1947年から1951年までカミュは、変わることなく『キャリバン』を支持しつづけました。この月刊誌は、のちに『ル・ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』の主筆となるジャン・ダニエルによって創刊され、毎月、文学時評や政治論説のほかに、さまざまな文学作品の全文を掲載していました。カミュはこの雑誌のために書き下ろしのテキストの執筆や既発表のテキストを寄稿をおこなっていました。

① 第13号(1948年1月)。「ルイ・ギュイユ」——ルイ・ギュイユ著『人民の家』への序文。

② 第24号(1949年2月)。「マドレーヌ・ルノー」——ジャン＝ルイ・バローの伴侶だった舞台女優マドレーヌ・ルノーに捧げられたオマージュ。このテキストは1949年2月12日にラジオで放送されました。ジャン＝ルイ・バローはカミュの戯曲『戒厳令』の舞台で主役を演じています。

③ 第15号(1948年4月)と第17号(1948年6月)。カミュのテキスト「執行される側でもなく、執行人でもなく」(『コンバ』に初出、1947年に『キャリバン』に再録)をめぐり1948年にエマニュエル・ダスティエ・ド・ラ・ヴィジュリーと論争した際の論点。

④ 第21号(1948年11月)。「民主主義、すなわち謙虚さのレッスン」(『ラ・ゴーシュ』に掲載された「教理問答抜きの民主主義についての考察」の再録)。

⑤ 第54号(1951年8月)。「私の知るかぎりもっとも素晴らしい職業のひとつ」——カミュがジャーナリズムの仕事について語っています。

⑥ 第37号(1950年3月)。カミュの戯曲『正義の人びと』の抜粋と舞台写真。カミュが深く愛したマリア・カザレスの写真が見えます。

6. 日本人への手紙

①『群像』、1951年2月号。朝鮮戦争が勃発して間もないころ、『群像』は平和を愛する日本人のために励ましの言葉を送ってくれるよう幾人かの知識人に依頼を出していました。カミュの「日本人への手紙」はこの依頼への回答です。

② 1952年7月24日付のオクムラ・ノリへの手紙。大阪外国語大学の学生オクムラ・ノリは新しい民主主義の理想とアメリカから押し付けられる軍事的義務の狭間で日本が陥っている矛盾についてカミュに述べました。カミュの返事は、先年の『群像』への回答と同じ見解を示しています。(カトリーヌ／ジャン・カミュ蔵、カミュ・コレクション、エクサン・プロヴァンス・メジャン図書館、複製権保有)。

③ 片岡美智への四通の手紙(1960年1月12日朝日新聞掲載の本人による解説付き)。京都外国語大学名誉教授片岡美智は、1939年から1951年まで政府奨学生としてフランスに留学し、日本人女性として初めてフランスで博士の学位を取得しました。最初の2通の手紙は『ペスト』の翻訳に関する問題に触れています。この2通の手紙が書かれたのは1949年4月17日から1950年1月24日までのあいだと推定されています。1951年12月21日付の3通目の手紙では、彼女が日本で大学教員(南山大学)になったことについての祝辞を述べています。1954年8月9日付の最後の手紙では、ふたたび広島の問題と『コンバ』掲載の自分自身の記事について触れています。(4通の手紙の複写を許可して下さった京都外国語大学附属図書館と三角美次教授のご協力に感謝します)。この4通の手紙は『カミュ研究第一号』(1994年、88-90ページ)に掲載されています。

7. アルジェリア戦争と市民講和条約の計画——『レクスプレス』、『ドゥマン』。

①『レクスプレス』(1955年7月23日)。「アルジェリアの未来」はカミュが1955年5月に『レクスプレス』に入社してから4つ目の時評です。この時評とそのひとつ前の時評には、アルジェリア戦争についてのカミュのきわめてよく練り上げられ思考をみることができます。カミュは、アルジェリアの将来は連邦制によってしか保証されえないと考えていました。

② フランス人の共同体とイスラムの共同体の和解を支持する目的でエル＝アジズ・ケスが創刊した月2回発行の『コムノテ・アルジェリエンヌ』(1955年10月1日)が、その創刊号に「アルベール・カミュからのメッセージ」を掲載しています。この文章は『アルジェリア通信』に再録されています。

③『ドゥマン』(1956年1月26日-2月1日)号は、1月22日にカミュがアルジェで発した「アルジェリアにおける市民講和条約への呼びかけ」の全文を掲載します。カミュは和解への第一歩として、そしてアルジェリアの未来のために、すべてのアラブ系・ヨーロッパ系の市民に対する一切の暴力行為の停止を呼びかけています。

④「市民講和条約への呼びかけ」の草稿の最初の2ページ(個人蔵)のコピー。「エヴリーヌとルネ・サンテスに、アルジェリアにいる彼らの兄弟、サンテス=カミュより」というカミュからの献辞が読み取れます。

8. カミュへのまなざし——無政府主義者たち、フランソワ・モーリアック、2010年のフランス

① 絶対自由主義者と無政府主義者はカミュを自分たちにとっても近い存在、彼らの一員だとさえみなしていました。1951年から1952年にかけて、1957年のノーベル賞受賞時、1960年のカミュの死の記事のタイトルを見るだけでもそのことがよくわかります。

- ・自由の証人(『ル・リベルテール』1951年6月12日)
- ・カミュの「反抗的人間」は我々の仲間か?(『ル・リベルテール』、1952年1月4日)
- ・反抗の擁護者(『ル・モンド・リベルテール』、1952年)
- ・ある仲間(『プロレタリア革命』、1957年11月)
- ・自由の作家、アルベール・カミュへの挨拶(『ル・モンド・リベルテール』、1957年)
- ・平和主義者(『ル・モンド・リベルテール』、1960年)
- ・アルベール・カミュあるいは困難な道のり(『ル・モンド・リベルテール』、1960年)

② フランソワ・モーリアックによるオマージュ。カミュの死に際しては、多くの知識人がオマージュを捧げています。カミュと反目していた作家のものでは、『ル・ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』掲載のサルトルの文章が大変有名です。一方、対独協力者たちの粛清がおこなわれた頃カミュが対立していたフランソワ・モーリアックからのオマージュは、それほど知られてはいません。本展では、1960年1月16日の『ル・フィガロ・リテレール』に掲載されたこのオマージュを展示します。モーリアックは「複数の顔のあるカミュは、私の気に障り、ときには苛々させられることもあった。魅力的なのは確かだが、期待はずれのところもあり、カミュについての私の意見はしょっちゅう変化した」と追想しています。「だが」と彼は続けています「近ごろでは我々のだれもが、カミュを自分の兄弟のように感じていたのだった」。

③ 2010年の年が明けるとすぐ、フランスの新聞雑誌は今年がカミュの死後50周年にあた

ることを報じ、各紙が別冊でカミュの特集を組みました。本展では、『フィガロ』『マガジヌ・リテレール』『テレラマ』『ル・モンド』のものを展示します。

9. 1952年2月22日の政治集会のポスター

1952年2月22日、11人のスペインの労働組合主義者がフランコ政権によって死刑宣告を受けたことに抗議する目的の大政治集会が開かれました。このポスターは、フランコをヒトラーになぞらえ「枢軸国の最後の生き残りに反抗せよ」と呼びかけています。カミュの名の傍らにはルイ・ギュイユーとルネ・シャールのような忠実な友人の名もみえますが、アンドレ・ブルトンやジャン＝ポール・サルトルのような『反抗的人間』をめぐって論争したり、やがて論争をすることになる知識人たちの名も見えます。はたして現代のフランスにおいて、このような集まりを想像できるでしょうか。

獨協大学図書館とフィリップ・ヴァネ（獨協大学外国語学部フランス学科、本フォーラムコーディネーター）はこの展覧会の開催のために尽力してくださった方々のご厚意に感謝いたします。カトリーヌ・カミュ、マリアンヌ・エンケル、マルセル・マハゼラ、谷口亜沙子、ギイ・バセ、三野博司、三角美次、高塚浩由樹、田中善英、京都外国語大学付属図書館、エクサンプロヴァンス・アルベール・カミュ・コレクション、ローザンヌ無政府主義国際研究所（敬称略）。

本カミュ展の解説テキストは、第22回獨協インターナショナル・フォーラムの公式ホームページ「アルベール・カミュ：現在への感受性」(<http://www.albertcamus.jp>)でもご覧になれます。